

リオ・デ・ジャネイロ日本商工会議所

第二十五代会頭 八十住 熱



今年9月、リオ・デ・ジャネイロ日本商工会議所(リオ日本商工会議所)は創立50周年を迎えた。この機会に改めて過去50年間の先達の努力に敬意を表するとともに、これから50年の益々活発な活動、発展を祈念したい。

私が最初に若干なりともリオ商工会議所と関わりを持ったのが1980年、25年前である。その後、直接その活動に参加したのが1995年、日本人学校の運営委員長兼理事として、帰国する1997年9月まで理事会に参加した。当時の日本人学校の生徒数は60名強、最盛期の1980年4月の406名とは比べ物にならない数であった。これが2005年には更に減少し21名、その中の過半数が先生方の子弟、総領事館関係で、リオ日本商工会議所会員の子弟は一桁となってしまった。この間1995年に日伯修好百周年の記念行事があり、日系4団体共同の実行委員会に参加し、リオ植物園内の日本庭園の再建の仕事をお手伝いした。その活動を通して日系コロニアの世界にも多くの知己を得た。

2003年5月から2005年3月迄の2年弱会頭を仰せ付かった。この間大きな事業は無かったが、会員減少とともに縮小した活動を活発にする為、全員参加の積極活動をスローガンに、各委員会の再編統合・活動の再活性に努めた。又2008年の移民百周年の準備委員会では、その主旨からいってイニシアティヴはコロニアがとるにせよ、リオ日本商工会議所として財政面、人材面等でのバックアップを出来る範囲で積極的にすることをコミットしている。又コロニアの日本語教育・日伯文化交流をはじめ、その他コロニアとの共同活動を財政面でサポートする為、“さくら基金”を設立した。金を有意義に使うことは、多大な労力を伴うものであるが、金を出すだけでなく労も惜しまず大いに有効に使ってもらいたいと思っている。

リオ商工会議所の50年を振り返るに、1955年の創立から1980年までの活動の拡大期、後半25年の日伯関係の希薄化に伴う縮小期に分けることが出来ると思う。経済的には、80年代のブラジルの失われた10年、90年代の日本の失われた10年、合計20年に及ぶ経済関係の希薄化が進んだ。その間多くのリオの日系企業はブラジルから撤退又はサンパウロへ事務所統合との理由でリオから去って行った。この間政治的にも、日本の現役首相の訪伯は、1982年6月の鈴木善幸首相、1996年8月の橋本龍太郎首相の2名を数えるだけである。

私が、生まれて初めてのパスポートを手にし、パンナム機でアンカレッジ、ニューヨーク経由、英國航空のコンコルドが駐機するリオのガレオン飛行場に降りたのは1980年9月であった。当時ほとんどのブラジル着の国際線はリオ、サンパウロの順に降りていた。当時民営化は実行されておらず、リオには政府系の大企業が集中し経済活動も今以上に活発だった。会社が私を伯国に派遣した目的は、1年間で、半年語学研修をし、残りの半年間、鉄鉱石の勉強をして来いというものであった。ジュイス・デ・フォーラ、オウロプレイトで夫々3ヶ月語学研修後、リオドセ社の研修員として、開発開始間もないサンルイス、カラジャスの山元に送り込まれた。当時日本で、カラジャスは、豊富且つ高品位の鉄鉱石の埋蔵量は確認されていたものの、搬出する鉄道、港等インフラが全く無く新たに未開のジャングルを開発し建設する必要があることから、当時のブラジルの財政状況、国際信用力を鑑みるに21世紀のプロジェクトと言われていた。当時のサンルイスの町は、高いビルも無く、さびれた南洋の田舎町であった。日本人など見ることもなく、東洋の匂いといえればブラジル風中華料理店が一店あっただけと記憶している。勿論日本料理店など有ろうはずも無かつた。飛行場から町に入る道も殆ど舗装されてなく、雨が降ると水溜りが出来、ぬかるんでいた。舗装部分も穴ぼこだらけで、車もまともな

スピードで走れない状態であった。鉄鉱石積出港の建設もまだ始まっておらず、サンルイス島と大陸を結ぶ橋の基礎工事に苦労している現場を何度か訪れた。

カラジャスの山元へは、6～7人乗りのプロペラ機で入った。勿論現在の飛行場などは無く、舗装していない仮の飛行場に降りた。研修員ということで夜は完成したばかりの5人用の飯場に一人で寝た。勿論冷蔵庫も無い。シャワーはドラム缶の上蓋をくり抜き雨水を貯めたものだった。昼はまともな道もなく原生林を切り拓いただけのぬかるんだ道をトラックで移動した。ここに3週間程滞在した。この間リオドセ社の若手技術者から、夜、アマゾンの星空の下、生ぬるいビールを飲みながらカラジャスプロジェクト実現への夢を聴き、彼らの熱い情熱を肌で感じた。このカラジャスプロジェクトはリオドセ社の努力と日本を中心とした鉄鉱石輸入国の協力により、21世紀を待たず、1986年に第一船を日本向けに出荷した。今や建設資金の返済も終わり、世界最大の鉄鉱山として、世界の鉄鉱石の供給基地となっている。又、鉄鉱石輸送の為、建設された鉄道港湾はブラジル北部経済開発の要となっている。このプロジェクトは国内的にはブラジルの南北問題を少しでも解消する為インフラの整備を目的としていた。失われた80年代に立ち上がった大プロジェクトは日本を中心とする海外からの借入金、日本製鉄会社を中心とする海外製鉄会社との長期契約、現場の若いブラジル人の夢とそれを実現させる情熱によって予定通り20世紀末まで15年残して完成した。この時のCVRD研修で、私はブラジルには一握りの極めて優秀かつ夢と情熱を持ち世界を相手に交渉し、ブラジルの夢を実現させる実行力も兼ね備えた超エリートが存在することを身をもって理解し、その中の同年代の何人かと夢を語れる仲となった。その後私はこの人達との人間関係によって確信を持ってブラジルとのビジネスを展開することになる。

2004年9月、現役総理大臣としては8年ぶりに小泉首相が訪伯した。又日本とブラジルはドイツ、印度と組み国連安全保障理事会の常任理事国に手を挙げている。一方ブラジル経済は為替インフレの安定が定着し、国際収支も貿易収支に於いて、オイルのネット輸出を目前に控え、更に大豆・鉄鉱石等の安定的輸出拡大で黒字基調を確立したと言って差し支えないであろう。日本の経済も金融システムを中心に一応落ち着きを取り戻してきたといえる。日本の外交がアジア諸国中心となるのは当然の事であろうが、地球の裏側、中南米にも関係強固な友好国を持つべきである。ブラジルは今や中南米一の大國である。ブラジルには日本に無い多くの地下資源が賦存する。又、ブラジルには地震も台風も無く全体が台地状で山脈・砂漠にとられる国土が相対的に極めて少ない。雨も全土で穏やかに且つ豊富に降り、しかも熱帯から亜熱帯に位置するので冬凍る土地がない。国土がこれだけ農地に適した広大な未開発地を保有する国は無い。ブラジルには140万人とも言われる海外最大の日系社会が有り、その社会的地位も認められたものになっている。日本は1950～70年代に国家プロジェクトを中心にブラジルに多くの資本、最新技術、人材を投入した。又ブラジル人の研修育成にも多大な努力をした。これを記憶に留めているブラジル人はまだ沢山いる。当初苦戦した製鉄・アルミ・パルプ植林事業も最近漸く利益でのるプロジェクトとなってきている。このようにブラジル人は他の中南米諸国と比べて日本をよく知り日本人を受け入れる用意があり、日本に対する期待も大きい。海外で事業をする上で その国の国民が好日であるということは最も重要な点と言える。現在の両国を取り巻くあらゆる環境を鑑みると、我々ブラジルを知る経済人は今こそブラジルへの活発且つ積極的な経済活動を再開する時と言える。勿論経済活動に限らず政治的にも南米の大國ブラジルの重要度は日本にとって今後益々増すであろう。このような流れの中で、リオ日本商工会議所の活動が益々活発・拡大していくことが期待される。日伯文化交流、日系コロニアの維持・人材育成に於いても大きな役割が期待されている。

50周年を迎えるこの機会に、将来の国ブラジル、140万人の日系コロニアを有するブラジルの国つくりの為、日本の国益の為に創立100年周に向けて、もう一度リオ日本商工会議所の創設理念を確認し、諸先輩、特に拡張期の前半25年の歴史を振り返っておくことも大切だと思う。